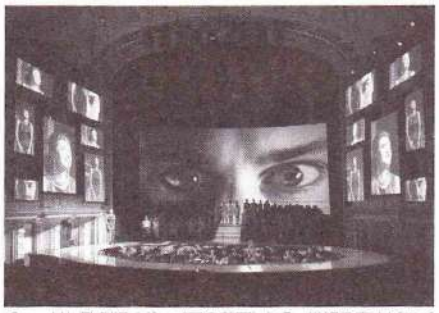
Opera ビエイトの夢、《ポッペアの戴冠》をチューリヒ歌劇場で演出

「《ポッペアの戴冠》は30年ほど前に初めて観てから、ずっと演出したいと願っていた」というカリスマ的演出家カリスト・ビエイトの夢がチューリヒ歌劇場で現実となった（6月24日、初日）。

劇場に入ると、いつもと違った舞台（写真参照）での開放感と、スクリーンに観客のアップがかわるがわる映ることにより一体感が生まれ、そこに幸運と美徳と愛の化身達が登場する。この演出は、暴君ネロの時代のローマ帝国を皆で見物している気にさせられる。エロティシズムも残虐さも、目をそむけたくなるギリギリの線で終わらせる最低の分別も感じられた。そして、この演出に必須のビジュアル度の高いキャストが、所見日の7月12日は千秋楽ということもあり、緊張感の高い芝居を見せた。題名役のジュリー・フックスは、妊娠後期のお腹をものともせずピンヒールで色気をばら撒き、病欠のヴァラー・サバドゥスに代わってネロを演じたデイヴィッド・ハンセンも、上半身裸で男女両刀のラヴ・シーンをこなす。モデル体型のディナ・ブレイウィック扮するドゥルシッラ、男装の麗人のデルフィン・ガルもオットーネを熱演した。全員、歌もうまいが、音楽的に一番モンテヴェルディとマッチしていたのはアルナルタ役のエミリアーノ・ゴンザレス=トロだった。そして、持ち味である恐るべき集中力でオッターヴィアを演じたステファニー・ドゥストラクがその存在感で光っていた。オッターヴィオ・ダントーネの音楽はこの演出にはもったいないほど深く、動きの少ない最後の二重唱は、作曲者が降臨してきたようだった。　（中 東生）



チューリヒ歌劇場《ポッペアの戴冠》から。世紀の鬼才ビエイトの演出で注目された上演だった ©Monika Rittershaus.